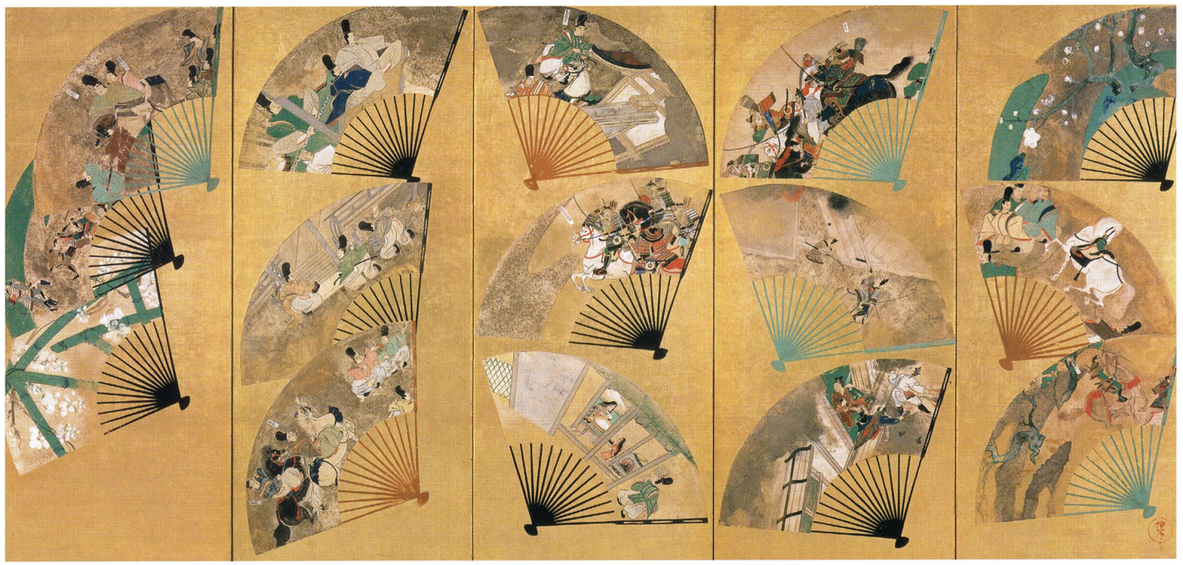
6. 扇面散屏風

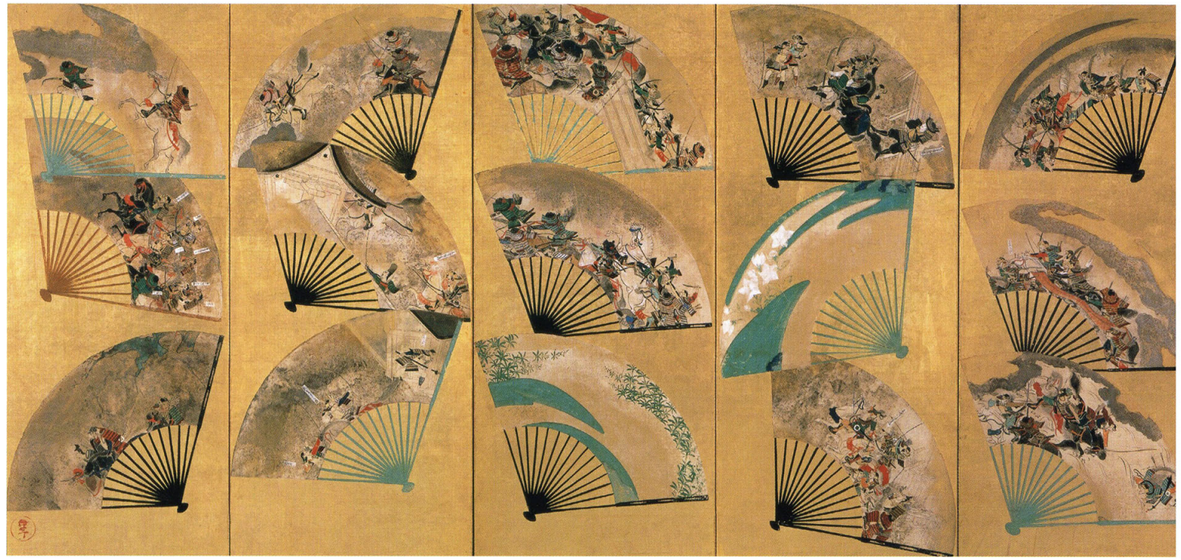
扇面散屏風　俵屋宗達

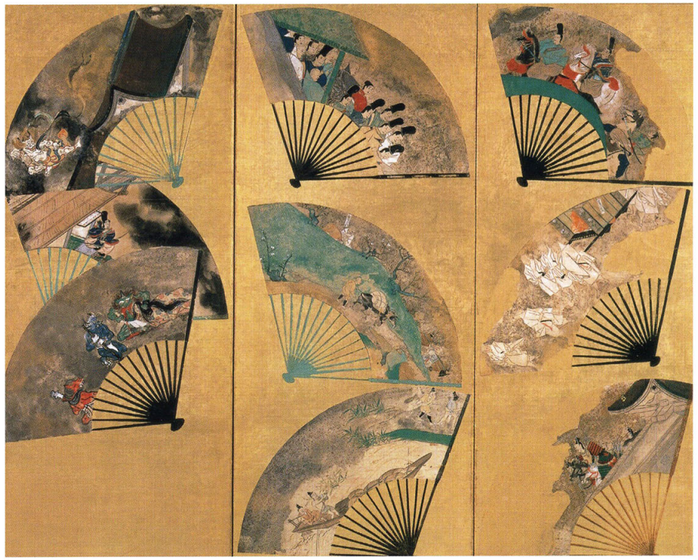
八曲一双
紙本着色
本紙（右隻）112.0×378.9　（左隻）112.0×377.7
総（右隻）124.2×390.0　（左隻）124.2×388.8
江戸時代（17世紀）

俵屋宗達（？～1640頃）とその工房絵師によって描かれた48枚の扇面を、各扇に3枚ずつ、自由な感覚で散らして全体を一つのデザインとして貼り上げ、金箔地に仕上げている。扇絵は「平治物語」「保元物語」を中心に、「伊勢物語」などを交え、さらに「草花図」を加えている。宗達は後水尾天皇ら宮廷との関わりも深いが、贈答に用いられた扇の扇面と、後にその扇面にあわせて描かれた扇面とをあわせて洒落た屏風に仕立て、宮中で用いられてきた品ではないかと考えられる。



右隻





左隻

Scattered Painted Fans　By Tawaraya Sotatsu

Pair of eight-fold screens
color on paper
<right screen> 112.0×378.9　<left screen> 112.0×377.7
Edo period, 17th century

Various scenes on 48 fan shaped papers painted by Tawaraya Sotatsu(?-1640) and his studio painters, pasted freely throughout the screen, finished with gold foil to form a total design. The scenes are mainly from *the Tale of Heiji*, *the Tale of Hogen*, and also *the Tale of Ise*, and scenes of flowers and grasses. Sotatsu was closely related to Emperor Gomizu-no-o and the Court, and this screen is assumed to have been stylishly made with fan shaped paper painted for fans to be gifts, added with those painted later to match the former. It is considered to have been used within the Imperial Palace.

宗達と宮中の関わりを深めた屏風

この屏風は旧御物の中でもよく知られ、〝御在来〟として皇室に伝えられてきた作品である。〝御在来〟というのは、明治以後、皇室が東京に移られてから収蔵されたものではなく、それ以前、京都御所の時代から所在していたものである、ということで、近世以前の制作にかかる作品の中、京都で保管されていた作品の中に、こうした伝来によって伝えられてきた作品がある。しかし、それが当初から御所のものとして制作されて伝来したものなのか、外部から入ったものなのかといった詳細は判らないままのものが多く、これまでに、作品そのものの詳細な調査と史料等の調査によって、判明しつつもある。そうした作品の一つである本屏風は、宗達が、寛永7年(1630)に後水尾院より楊梅図など三双の屏風絵制作の下命を受けたという史料(「一条兼遐消息」)より宮廷と関わりを持っていたということを物語っているものであろう作品として、宗達筆として伝わる多くの作品の中でも、高い評価を得て、これまでにも宗達を論じる上で欠かせない作品となってきた。そうした作品の修理を実施するということで、これまでの先学によって論じられ、問題点等となっている点について解明の手掛かりを得ることも考慮した調査も行った。修理の前に、こうした調査計画を立てて修理を行い、修理後に調査や修理で得られた資料をまとめて考察することの重要性を認識させてくれた屏風でもあった。

本屏風の修理では、各扇面が重なるように配置されてはいるが、その重なり部分は下の扇面のその部分を切除しており、扇面画の本紙は重なっていないこと。また、その部分の下には金箔は貼られていないこと。さらに扇骨の絵具が扇面の上にのっていること、が確認できた。つまり、金箔は、扇面画をどのように配置するかを決めた後にその部分を除いて施され、所定の位置に扇面画を貼り付けて後に扇骨を描いたのである。さらに、各隻両端の第1扇と第8扇では、貼り付けた扇面画の扇骨の描写が小縁の上にのっているので、扇骨の描写は屏風装に仕立てられ、小縁、大縁も装着されて後に描かれたものであることが判断できる。修理以前に、48枚の扇面画は、『保元物語』『平治物語』を典拠とする図様が大部分で、一部に『伊勢物語』を典拠とするものがあるほか、草花図が含まれていることが分かっており、また中には一度扇に仕立てられていたと見られる折痕があるものがある。

以上より、この屏風は、48枚の扇面画が集まる→八曲一双の屏風にその扇面画の配置をデザインする→扇面画の重なり部分の処置をすると同時に、屏風面台紙に配置の扇面部分を除いて金箔を貼る→扇面画を貼り付ける→屏風骨に下張りを施しておいた下地に本紙を貼りあげ、その四周に小縁、大縁の裂地を貼り付ける→各扇面画の扇骨を描写する、という制作過程を想定することが出来た。

さて、修理以前に様々に論じられていたのが、扇面に確認できる印の問題である。宗達の作品中に見られる「伊年」あるいは「太藤」の印が、本屏風の扇面中にもいくつか確認でき、またそれの有無が明確でないものにもその痕跡が確認できるなどと論じられてきたことを、今回の修理で確実にとらえるため、透過光や赤外線などを用いた調査も加えて考察した。しかし、相当に薄くなっていると思われるこれらを確認することは、こうした調査でも容易でなかったのが事実である。確実にそうした印であることが確認できる箇所、その可能性がある箇所をとらえる一方、今回のこの調査で、他の作品に認められていた丸形の糸印と角形の糸印が別に確認でき、それらが確認されていた他の作品との比較が可能になったことは一つの大きな成果であった。と同時に、左隻第5扇最上部扇面には、その表面に「太藤」の丸印かと判断できる印、裏面には丸形の糸印があり(37頁左図版)、さらに「たわらや藤七郎／十八枚之内」と記された墨書が確認されたのである(37頁右下図版)。これにより、「太藤」の印は「たわらやとうしちろう」を示すものかと推察が可能となったことは、宗達とその工房の画家の実態を知る上で、実に大きな発見であった。

さらに、屏風骨に貼られた下張りには、大福帳や書状と見られる古文書が使用されており、その中に元和3年(1617)、同5年の年記のあるものがあったこと。また遅くとも寛永初期の成立と考えられている『きのふやけふの物語』を拝借した書状(37頁左下図版)や、桃山から江戸初期に流行した柳橋水車図のような「水くるまの屏風」が出来上がったとする文書、さらに『閑吟集』(永正15年<1518>成立)に収められる「地主の桜は散るか散らぬか…」の一説や芸能に関する記述は、そうした芸能が盛んであった近世初期の様相を窺わせるなど、下張り文書からは明らかに屏風が近世初期の成立であることを示唆する資料が確認できている。

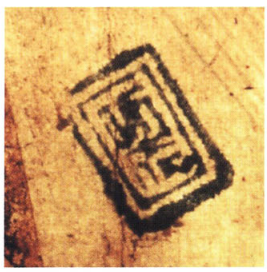
そして、もう一つ、本屏風の伝来を物語るのが、大縁の裂である。修理後に再用が難しいため、取り外した後に調査、整理した結果、捩り組織による紗のような薄物の紫地の織物で、菊花と蕾を丸く湾曲する茎に葉の細かな描写も織り込んで表した美しい唐草文様であることが確認できた。文様、織技法のいずれから見ても、江戸初期の織物と考えて問題はない。

こうした修理の機会に判明した様々な資料から、本屏風の制作時期を1620～30年代と考えることに無理はなく、また伝来の通り、制作当初から御所に伝わってきた可能性が大きい作品であることが分かった。同時に、俵屋藤七郎という絵

師の名前が確認できたことで、宗達を長とする俵屋工房の様子を考察する貴重な資料ともなった。

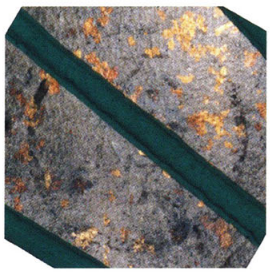
修理という機会を、単に作品を修繕する、ということだけではなく、作品を調査して良く知り、その作品にふさわしい姿とするための修理方針を考える、という姿勢に基づいた調査、資料収集を行ったことで、このような制作当初から大きく手を加えられることなく大切に伝わってきた作品の、その実態に迫ることができ、大きな成果を残すことが出来たとも言えよう。

丸糸印

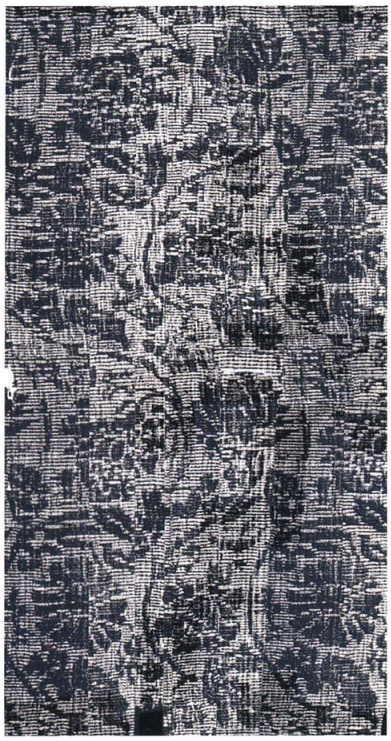


角糸印

「伊年」印

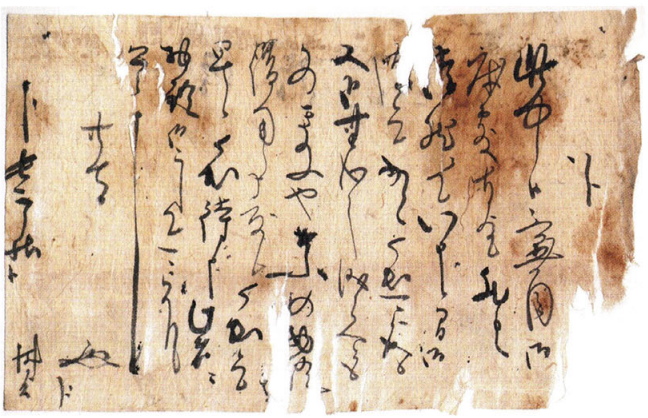


「太藤」印



大縁の菊唐草文様紗
（縁裂を並べて文様を復元したもの）

扇面裏の墨書（左隻第５扇最上部扇面）



下張り文書（『きのうやけふの物語』拝借の書状）

・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

開館20周年記念
美を伝えゆく —名品にみる20年の歩み—

編集　宮内庁三の丸尚蔵館
制作　株式会社 東京美術
翻訳　黒川廣子
発行　宮内庁
平成25年10月12日発行

© 2013, The Museum of the Imperial Collections, Japan

The 20th Anniversary Exhibition of the Sannomaru Shozokan
Passing Art works to the Future –The Museum's 20 Years of Research on Masterpieces–

Edited by the Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shozokan
Produced by Tokyo Bijutsu Inc.
Translated by Hiroko Kurokawa
Published by Imperial Household Agency
Issued on October 12, 2013

© 2013, The Museum of the Imperial Collections, Japan